

今週の為替相場見通し(2020年2月3日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		108.31 ~ 109.27	108.32	107.50 ~ 109.30
ユーロ	(ドル)		1.0992 ~ 1.1096	1.1094	1.0900 ~ 1.1150
(1ユーロ=)	(円)		119.77 ~ 120.44	120.19	119.50 ~ 121.85
英ポンド	(ドル)		1.2976 ~ 1.3210	1.3204	1.3100 ~ 1.3300
(1英ポンド=)	(円)	*	141.26 ~ 143.29	143.11	141.00 ~ 144.00
豪ドル	(ドル)		0.6683 ~ 0.6825	0.6686	0.6550 ~ 0.6750
(1豪ドル=)	(円)	*	72.45 ~ 74.34	72.51	71.00 ~ 73.50

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 岡本 明生

(1)今週の予想レンジ: 107.50 ~ 109.30 円

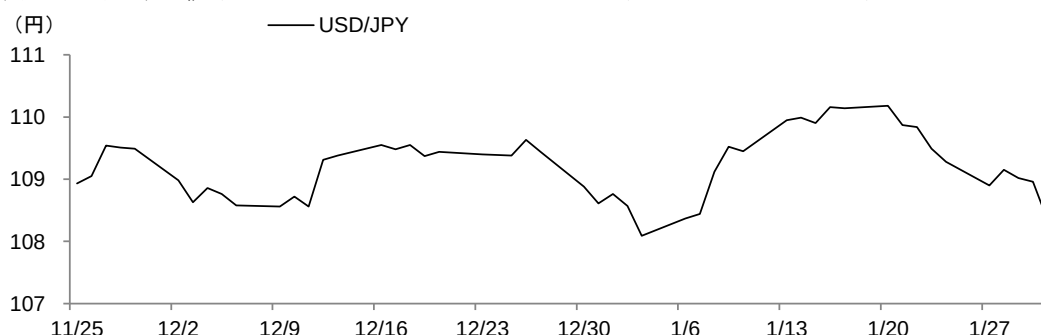
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の今週のドル/円相場は週後半に安値をつける展開。週初27日に108円台後半でオープンしたドル/円は、新型コロナウイルスの感染拡大を懸念する流れが継続し上値の重い展開。アフガニスタンのタリバンが米国のスパイ機を撃墜したとの報道に円買いが強まるも、途中ドル買いが入りつつ109円前後での推移が続いた。28日はFOMCを控え積極的な取引は控えられたが、前日の株の下落は過剰との見方が強まり、米株先物と米金利が上昇し小幅にドル高が進んだ。29日は日本株が堅調に推移し109円台前半を推移した。その後、米12月中古住宅販売仮契約が予想を大きく下回るとドルは下落。FOMC後のパウエルFRB議長の見会では、FRBのT-Bill購入がいずれ延長されるとの見方が強まり、米金利が低下し、ドル/円も109円付近まで連れ安となった。30日はアジア株が下落する展開に円が買われ、じり安が続いた。NYダウ平均が下落し、引き続き米金利が低下する展開にドルは再び値を下げ、米国内で人から人への新型コロナウイルス感染が明らかとなると、一時108.58円まで下落した。その後は感染阻止に向けた中国の対応が評価され楽観ムードとなったこと、米大手企業の決算発表が好感されると109円付近まで値を戻した。31日は109円手前での推移が続いたが、海外時間に入り米30年債利回りが2%を割り込む動きにつれドル/円もじり安の展開に。週安値の108.31円まで値を下げた後は、軟調な株式市場を横目に108円台前半でもみ合いとなり、108.32円で越週した。

今週のドル/円は、下値余地を探る展開を予想する。新型コロナウイルスへの警戒感、本日3日春節明けで再開する中国市場を前に非常に高まっており、中国PBOC(中央銀行)が18兆円規模の資金供給を行うとしているが、その対応の評価が試される週初となろう。好調な企業決算が続くようであれば市場のサポートとなるものの、先行きを見るセンチメント系の経済指標の重要度・影響力が増していくと思われる。今週は米1月ISM製造業景況指数など多くの発表を控えており、その結果次第で一段と下押しする場面にも警戒したいところ。しかし、実体経済への悪影響の規模がはっきりと見通せないことから、ある程度下がったところからは買い戻されると見ており、1月安値の107.65円を前に買い戻しが入るかが注目。

(3)先週末までの相場の推移

先週(1/27~1/31)の値動き: 安値 108.31 円 高値 109.27 円 終値 108.32 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部 為替営業第二チーム 谷舗 直弥

(1) 今週の予想レンジ: 1.0900 ~ 1.1150 119.50 ~ 121.85 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は上値重く推移したものの、終盤にかけて高値をつける展開となった。週初27日に1.10台前半でオープンしたユーロ/ドルは、新型肺炎が予想以上の感染力を示し株価が下落するなか、特段方向感なく推移。28日は新型肺炎への懸念が一段落するなか株価が戻すも、米経済指標の好調などを背景に節目の1.1000を割り込んだ。ただし、同水準では一定の買い意欲あり反発した。29日朝方は前日からの買いが継続し1.10台前半で推移していたものの、日中にかけては次第に上値が重くなり、欧州勢参入後には再び1.10台割れを示現。一時週安値となる1.0992まで下落した。30日はFOMCの結果を受けて米長期金利が低下するなかユーロ/ドルは1.10台での推移となった。日中は特段方向感なく推移したものの、欧州勢参入後から次第に底堅く推移。31日は新型肺炎への懸念から再びリスクオフムードが強まり、ユーロ/ドルは若干下落。その後、ユーロ圏10~12月期GDPが公表され前期比0.1%増、前年比1.0%増となり、ともに7~9月期から鈍化した。また、ユーロ圏1月CPIは前年比1.4%増となった。両指標ともほぼ市場予想通りの数字で、公表直後は動意なかった。しかし、ロンドンフィックスにかけて月末リバランスとの噂のドル売りが持込まれ、ユーロ/ドルは反発し週高値となる1.1096まで上昇し、結局1.1094で超週した。

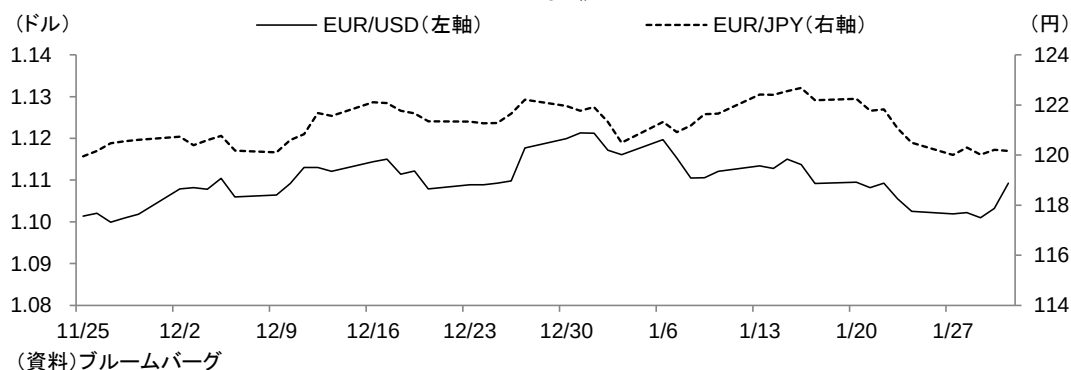
今週のユーロ相場は上値の重い展開を予想。前回ECB政策理事会ではラガルド新総裁のもと今後の金融政策の方針について、様々な検証を開始することが明らかとなった。本検証は1年近い時間をかけて行われる予定で、今後のECBの動向によってユーロ相場も大きく影響されると思われ、その動向には注目したい。また他通貨と同じく新型肺炎関連の報道によってもユーロ/ドルの上値が重くなる可能性があり、注意を払いたい。今週は3日にユーロ圏1月製造業PMI、4日にユーロ圏12月PPI、5日にユーロ圏1月サービス業PMIが予定されている。特に3日の製造業PMIについては好不況の節目である50を長らく下回っている状況だったが、前回公表分では底入れの兆しが見えており、引続いて景況感が回復しているかに注目が集まる。ただし、基本的には新型肺炎による懸念や他地域と比べ弱いファンダメンタルズが重しとなり、上値の重い展開を予想する。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(1/27~1/31)の値動き:

(対ドル) 安値 1.0992 高値 1.1096 終値 1.1094

(対円) 安値 119.77 高値 120.44 終値 120.19



3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1) 今週の予想レンジ: 1.3100 ~ 1.3300 141.00 ~ 144.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、軟調気味の横這い先行から、週後半は上昇。週後半のポンド上昇は、ドル全面安の結果でもあり、円、ユーロの(対ドルでの)上昇と並行したが、対円、対ユーロでも、ポンドはそれぞれ水準を切り上げた。つまり、週後半はポンド全面高でもあったわけだが、その要因は、30日の英中銀金融政策委員会における基準金利引き下げの見送りにあったものと考えられる。アナリスト予想の大半は、金利据え置きを見込んでいたものの、SONIAなど英ポンド短期金融市場は直前まで6割前後の利下げ可能性を織り込んでいた。結果は、単に利下げを見送っただけでなく、7対2の多数決で、これは昨年11月、12月の同委員会と同じ票読み。1月に入って俄かに利下げ投票への傾倒をにらめさせたカーニー総裁(9日)、テンレイロ委員(10日)、プリハ委員(12日)らは、結局、ひとりも利下げに投票しなかった。並行したドル全面安に関しては、新型コロナウイルス蔓延に対する警戒感がリスク回避を促した結果と考えることができた。近頃は、リスク回避を言い訳にドルが買われることもあったし、リスク回避のユーロ買いというの聞き慣れない値動きだが、日本、ユーロ圏の他、スイスなどの経常黒字国(経済)の通貨がリスク回避の強まりを受けて買い上げられるのは、そう不自然なこととも思われなかった。

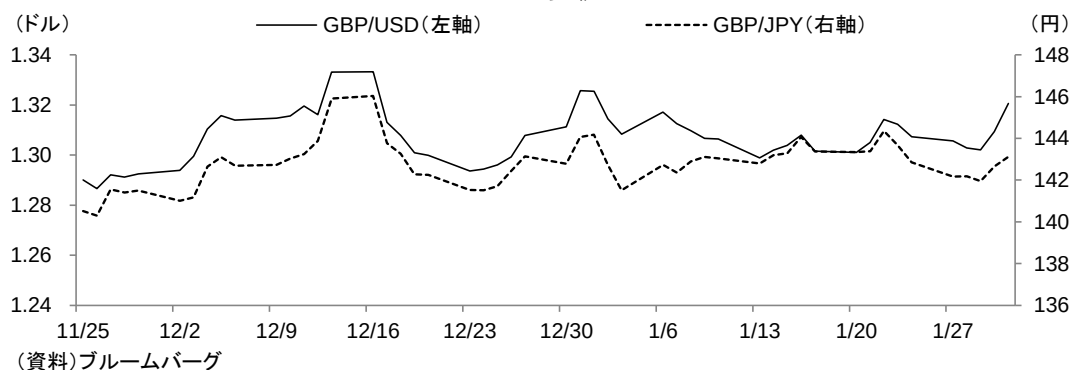
今週の英ポンド相場は、方向感を欠いた膠着を予想。ただし、対ドルでの伸びはもう少し見込めるかもしれない。英中銀が7対2で利下げを見送った事実には若干の意外感もあったが(少なくとも一票ぐらいいは利下げ票が増えても不思議ではなかった)、これで利下げ議論が雲散霧消するとも思えない。今後、自由貿易交渉を中心に、離脱後の英とEUの関係構築に向けた交渉が始まるはずだが、両者は早くも公平な競争条件(労働規制/環境規制など)、漁業権などの懸案事項で火花を散らしている。既に予見される交渉の不調が、今後、現実味を帯びてくれば、またぞろ英景気低迷、利下げといった道筋が浮上してもこよう。もっとも、こうした見立てはあくまでも中期的(少なくとも数週間単位の)な可能性の話で、利下げ見送りで進んだポンド堅調がこれ以上続くとは見込み難いのと同時に、敢えてポンド反落を見込む理由も今は考え難い。金融市場全般では、引き続き、新型コロナウイルスの蔓延に対する警戒感が最大の関心事となろう。この間のドル全面安には、リスク回避の経常赤字国通貨売りという側面もあったろうが、主要国の株式市場の現状(株価時価総額のGDP比など)を鑑みれば、「最も伸び切った株式市場」が米市場という不安は確かにあろう。7日(金)発表の米1月雇用統計に、同月後半に急速に懸念が強まった同ウイルスの影響が反映されるとは考え難いものの、仮に数字が下振れした場合には、米株価の先行きにより一層弱気な見方を強める可能性(相対的なドル安要因)も警戒されるだろう。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(1/27~1/31)の値動き:

(対ドル) 安値 1.2976 高値 1.3210 終値 1.3204

(対円) 安値 141.26 高値 143.29 終値 143.11



4. 豪ドル

業部 為替営業第二チーム 玉井 美季子

(1) 今週の予想レンジ: 0.6550 ~ 0.6750 71.00 ~ 73.50 円

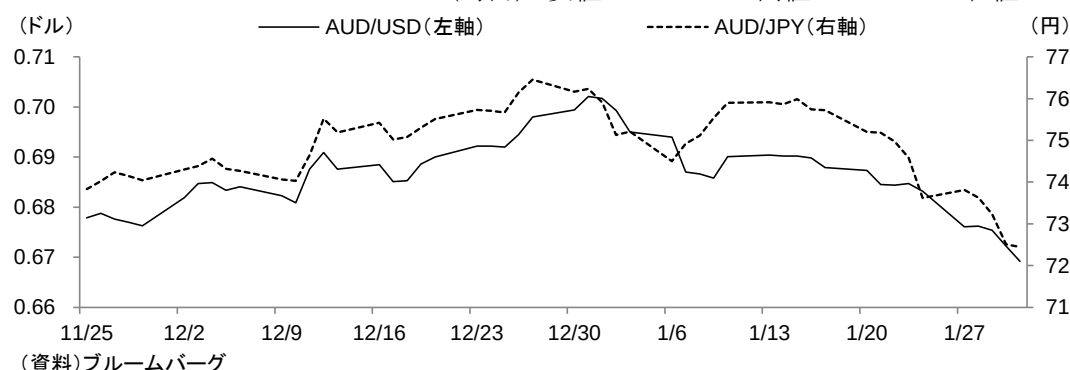
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場はリスクオフムードの中、軟調推移。週明け27日は豪州市場休場の中、豪ドルは東京オープン前に週高値となる0.6857を付けたが、中国での新型コロナウイルスの感染拡大懸念や春節延長による経済鈍化懸念を受けた商品相場の下落を背景に豪ドル安優勢の展開。終日軟調に推移した。28日は引き続き上値の重い展開が続いたが米株が反発しリスクオフムードが和らいだことで下げ幅を縮小した。29日は豪10～12月期CPIが市場予想を上回ったことで豪ドル買い優勢となり0.67台後半をつけた。しかしその後は資源価格の低下を受け、売り戻された。30日は引き続き新型コロナウイルスへの懸念から豪ドル売り優勢となり0.67ちょうどまで下落。その後はWHOが緊急事態宣言を行ったことで対策が講じられるとの見方が広がり下げ止まった。31日は1月中国非製造業PMI予想を小幅に上回ったことを受けて一時豪ドルが買われたものの、その後は再び新型コロナウイルスへの懸念からリスクオフムードとなり週安値となる0.6683まで下落。対円でも週安値となる72.45まで下落し、そのまま安値圏で越週した。

今週の豪ドル相場は上値の重い展開を予想する。コロナウイルス感染拡大は終息が見えず、リスクオフムードが継続しそうだ。中国での店舗や工場の閉鎖を決めている企業も多く、今後中国経済への影響が懸念される。ただ、4日にはRBAがあり、市場では5割ほど金利引き下げを見込む中、金利据え置きとなった場合には豪ドル高圧力が高まる可能性がある。1月に発表された経済指標は雇用者数やCPI等市場予想を上回るものが多く、金利据え置きとなる可能性が高い。一方で、豪州では大規模森林火災や新型コロナウイルスの感染拡大による景気減速への影響が懸念されている。景気見通しの引き下げや今後の利下げ示唆等があれば、豪ドルの重石となりそうだ。また、5日のロウRBA議長の講演も注目される。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(1/27～1/31)の値動き: (対ドル) 安値 0.6683 高値 0.6825 終値 0.6686
(対円) 安値 72.45 高値 74.34 終値 72.51



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。